

解 説



品質工学のつながり (5)

Connection of the Quality Engineering (5)

澤田 位*

Tatsu Sawada

1. 品質工学(会)とのつながり

品質工学会は来る2017年、設立25周年を迎える。四半世紀前に遡る品質工学会設立前後のことを思いながら「品質工学(会)とのさまざまな局面でのつながり」を考える。かつて田口玄一が「フォーラム(学会)設立の目的は品質工学を定義すること」と言っていたように、品質工学会は田口の技術哲学を核とした品質工学の学問的確立と深化発展を期する“場”あるいは“形”として設立され、今日にある。

その品質工学会は、品質工学を創始した田口玄一の同志であり、品質工学発展のプロデューサーであり、オーガナイザーである矢野宏の作品だ、というのが私の認識である。矢野の作品作りの一端に編集者として立会った者の一人として「矢野を媒介とした品質工学とのつながり」を記しておきたい、ということが本稿執筆の趣旨である。

一般に、人は目的を遂げるために往々にして^{おもね}阿る。しかし矢野は論敵に対しても「弟子」へも決して阿らない。江戸っ子然とした^{ちよくせつ}直截な物言いは、とかく誤解を与えかねない。だから“敵”が増えることはあっても味方を増やすことは容易でない。品質工学研究や活動の進め方について、納得できない話に対してはとりわけ容赦ない。筆者も何度か^{ひど}酷い目にあっている。

もっとも論敵や研究の間違いに対するに壊滅的かつ徹底的な物言いは、かつての田口玄一の十八番でもあったのだが、矢野は今日まで40年以上にわたり研究実践を続けるだけでなく、多くの賛同者や論敵の賛同も得て品質工学の学問としての発展と普及に向けた活動を続けている。

田口自身が「矢野は品質工学発展の中で兼高とともに頭が下がる思いのする人」(『やさしい「タグチメソッド」の考え方』, 日刊工業新聞社, 2003年)と述べているように、田口の“思い”を共有し、研究上の同志として品質工学の深化発展を追求し続けている。「品質工学のつながり」を考えるとき、私にとっては矢野宏との関わりとなるのだが。表題に(会)としたのは、その「つながり」が結果として品質工学会との「つながり」でもあったことを意味している。

もとより矢野にとっては、私との関わりはほんの一面に過ぎない。そのことを承知の上で、また筆者からする「つながり」の記述が一時的なものとならざるを得ないことも承知の上で、この「つながり」を自分なりの立ち位置から記したい。それは四半世紀前の話ではあるが、筆者にとっては到底“歴史”などではなく、現在も続く関わりである。“当事者”である矢野宏のなした足跡や品質工学への思いは、この40年にわたり執筆され続けてきた膨大な文献や論説、論文に込められている。大量の文献であるが、改めて参照されたい。もとより矢野の仕事は田口玄一とは別の意味で巨象のごとくであるので一筋縄にはいかない。

2. 田口の技術哲学と矢野宏とのつながり

私の考える品質工学の技術哲学とは、田口玄一による「品質」の定義と「自由の拡大」という思想、そして「田口の三段階論」というビジョンである。「三段階論」は私がひそかに名付けているものだが、(品質工学の)方法論を前提に技術者の目標を具体的に提示している点で、世界的にも独創的かつ優れた技術哲学である。それは「(1) 予測や診断、判

* 元日本規格協会